

令和5年10月20日

文化審議会の答申（史跡名勝天然記念物の指定等）

文化審議会（会長 佐藤^{さとう} 信^{まこと}）は、10月20日（金）に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、史跡名勝天然記念物の新指定12件・追加指定等24件及び登録記念物の新登録4件について、文部科学大臣に答申しました。今回答申された史跡等の指定等の詳細は、別紙のとおりです。

この結果、官報告示を経て、史跡名勝天然記念物は3,364件、登録記念物は132件となる予定です。

<担当> 文化庁文化財第二課

課 長

田中 禎彦

課 長 補 佐

田中 佳幹

主任文化財調査官（史跡部門）

渋谷 啓一（内線9767）

主任文化財調査官（名勝部門）

平澤 毅（内線9776）

主任文化財調査官（天然記念物部門）

江戸 謙顕（内線9778）

主任文化財調査官（埋蔵文化財部門）

近江 俊秀（内線9766）

審議会係長

森 幸一郎（内線9757）

電話：075-451-4111（代表）

別 紙

史跡名勝天然記念物

(令和5年10月20日現在)

種 別	現在指定件数	今回答申件数			合計（現在指定件数と 答申件数との合計）
		新指定	解除	統合に よる減	
史 跡 (うち特別史跡)	1, 8 8 8 (6 3)	9 (0)	0 (0)	2 (0)	1, 8 9 5 (6 3)
名 勝 (うち特別名勝)	4 2 7 (3 6)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	4 2 9 (3 6)
天然記念物 (うち特別天然記念物)	1, 0 3 8 (7 5)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	1, 0 4 0 (7 5)
合 計 (うち特別史跡名勝天然記念物)	3, 3 5 3 (1 7 4)	1 3 (0)	0 (0)	2 (0)	3, 3 6 4 (1 7 4)

(備考)

件数は、同一の物件につき、二つの種別に重複して指定が行われている場合（例えば、名勝及び天然記念物など）、それぞれの種別につき1件として数えたものです。

なお、重複指定物件を1件として数えた場合、

現在指定件数は、 3, 2 3 9 件

答申後合計件数は、 3, 2 5 1 件 です。

登録記念物

(令和5年10月20日現在)

種 別	現在登録件数	今回答申件数		合計（現在登録件数と 答申件数との合計）
		新登録	抹 消	
遺跡関係	12	0	0	12
名勝地関係	109	4	0	113
動物、植物及び 地質鉱物関係	7	0	0	7
合 計	128	4	0	132

(備考)

件数は、同一の物件につき、二つの種別に重複して登録が行われている場合（例えば、遺跡関係及び名勝地関係など）、それぞれの種別につき1件として数えたものです。

なお、重複登録物件を1件として数えた場合、

現在登録件数は、127件

答申後合計件数は、131件 です。

「新指定等・新登録」答申物件

《史跡名勝天然記念物の新指定》

【史跡】 9件

「茨城県の県央部に所在する、総数500基以上と推定される東日本最大級の横穴墓群」
よこあなぼぐん

1 じゅうごろうあなよこあなぐん 十五郎穴横穴群【茨城県ひたちなか市】

茨城県の県央部に所在する東日本最大級の横穴墓群。274基が確認されており、未知のものも含めると総数500基以上と推定される。7世紀前葉に造営が始まり、9世紀前葉まで追葬で使用される。東日本を代表する大規模横穴墓群であり、古墳時代終末期から平安時代初頭の東日本社会を考える上で重要である。



提供：ひたちなか市

「中世飛驒国の中心・古川盆地の要衝に飛驒国司姉小路氏によって築かれた中世山城群」
ひだし こくしあねがこうじし やまじろ

2 あねがこうじししるあと 姉小路氏城跡【岐阜県飛驒市】

ふるかわじょうあと
古川城跡

こじまじょうあと
小島城跡

のぐちじょうあと
野口城跡

むかいこじまじょうあと
向小島城跡

こたかりじょうあと
小鷹利城跡

14世紀後葉に飛驒国司となり三家に分立した姉小路氏が、中世飛驒国の中心地である古川盆地の、各々の拠点に築いた中世山城群。後に同地へ進出する三木氏や金森氏の手による改修の跡も良好に残り、中世飛驒国の変遷過程を物語る山城群である。



提供：飛驒市

「9世紀初頭から10世紀中葉までの間に機能した^{みかわこくふこくちょうあと}三河国府国庁跡」

3 ^{みかわこくふこくちょうあと}三河国府跡【^{とよかわし}愛知県 豊川市】

9世紀初頭から10世紀中葉までの間に機能した三河国府国庁跡。1期から3期に変遷し、3期には^{ほったてばしら}掘立柱建物から^{そせき}礎石建物へと建物構造が変化する。国府成立直前から衰退までの変遷を知ることができ、古代の地方支配の実態を知る上で極めて重要な遺跡。



提供：豊川市

「^{にしほうき}西伯耆の交通の要衝に築かれた城館で、中世から近世における改修等の状況が良好に残る。」

4 ^{おだかじょうあと}尾高城跡【^{よなごし}鳥取県 米子市】

^{いずも}出雲と^{にしほうき}西伯耆を結ぶ東西の交通路及び山間部と日本海をつなぐ交通の結節点に築かれた中世城館。13世紀から14世紀の在地領主の住居から始まり、大型の堀と^{どるい}土塁、さらに石垣を持つ城郭として整備された。戦国時代以来、交通の要衝として争奪され、城主の変遷と各段階での改修等の状況が良好に残っている。



提供：米子市

「^{ばくしんち}爆心地から2 km以内に位置する^{ひばく}被爆建物で、その痕跡を顕著に残す遺跡」

5 ^{ひろしまげんぱくいせき}広島原爆遺跡【^{ひろしまし}広島県 広島市】

爆心地から2 km以内に位置する被爆建物で、その痕跡を顕著に残す遺跡。内部が全焼した旧燃料会館、爆風の痕跡が残る旧日本銀行広島支店、炭化した^{もくれんが}木煉瓦などが残る^{きゅうほんかわ}旧本川国民学校校舎、被爆伝言が残る^{きゅうふくろまち}旧袋町国民学校校舎、被爆直後に被害を発信した旧中国軍管区司令部防空作戦室、^{はり}梁が破損したまま現存する^{たもんいん}多聞院鐘楼から成る。



提供：広島市

「西条駅近くに広がる近世に始まり近代に発展し現在も続く近代屈指の酒造施設群」

6 ^{さいじょうさかぐらぐん} 西条酒蔵群 ^{ひがしひろしまし} 【広島県 東広島市】

西条駅前の東西約800m、南北約300mの範囲に広がる近世に始まり近代に発展し現在も続く近代屈指の酒造施設群。江戸時代建設の^{はくぼたん} 白牡丹酒造 ^{えんぼうぐら} 延宝蔵、明治6年（1873）建設の^{かもつる} 賀茂鶴酒造一号蔵、昭和4年（1929）建設の旧広島県 ^{じょうぞう} 醸造試験場（^{かもいずみ} 賀茂泉酒造の一部）、大正14年（1925）建設の^{ふくびじん} 福美人酒造 ^{だいこくぐら} 大黒蔵 などから成る。



提供：東広島市

「^{ほそかわけいちょうけ} 細川京兆家の ^{うちしゅう} 内衆・^{こうざいし} 香西氏の拠点で、後に ^{はしばひでよし} 羽柴秀吉の四国攻め時に改修された山城」

7 ^{かつがじょうあと} 勝賀城跡 ^{たかまつし} 【香川県 高松市】

室町幕府の^{かんれい} 管領・細川京兆家の内衆・香西氏の拠点。高松湾の西端に位置し、北麓には^{こうざい} 香西浦を擁する。山頂中央部の堀切状遺構を境に、南西部は^{しゅかく} 主郭及び全体を土塁で囲み、^{くちが} 喰い違い ^{こぐち} 虎口など新しい構造を持ち、羽柴秀吉の四国攻め時等に改修されたことが分かる。



提供：高松市

「11世紀半ばに貿易拠点となった『^{ちくぜんはかたつとうぼう} 筑前博多津唐房』と一体的に築造された港湾施設」

8 ^{はかたいせき} 博多遺跡 ^{ふくおかし} 【福岡県 福岡市】

11世紀半ばに鴻臚館に代わり貿易拠点となった「筑前博多津唐房」と一体的に築造された港湾施設。^{いおう} 硫黄や^{とうじき} 陶磁器等、当時の交易の具体的な内容を示す遺物が出土するなど、中世のアジア規模での交易の内容やその担い手を示す重要な遺跡。



提供：福岡市

「九州を代表する中世から戦国時代の武士団、菊池氏^{きくちし}の室町時代以前の本拠に係る遺跡」

9 菊池氏遺跡【熊本県菊池市】

九州を代表する中世から戦国時代の武士団、菊池氏の室町時代以前の本拠に係る遺跡。北宮^{きたみや}阿蘇神社^{あそ}、北宮館跡^{きたみややかたあと}、河川の護岸^{ごがん}施設を検出した菊之池^{きくのいけ} B遺跡から成り、中世武士団の領域経営の在り方や鎮西^{ちんぜい}随一の国御家人^{くにごけにん}、そして肥後^{ひご}国守護^{くにしゅご}にまで成長する過程を示す。



提供：菊池市

【名勝】 1 件

「溶岩流により形成された柱状節理^{ちゅうじょうせつり}の断崖に懸かる直瀑^{ちよくばく}で、特に近代以降著名となった。」

1 白水滝【岐阜県大野郡白川村】

約2,200年前の新白山^{しんはくさん}火山の溶岩流によって形成された柱状節理の断崖に懸かる高さ67.4mの直瀑で、乳白色に見えるその姿から「白水滝」と呼ばれ、特に近代以降、日光の華厳瀑^{けごんぱく}、熊野の那智大滝^{なちのおおたき}と並び称される名勝地として広く知られるようになった。



提供：白川村

【天然記念物及び名勝】 1 件

「断層^{だんそう}や節理^{せつり}の発達する砂岩層^{さがんそう}が風化・侵食を受けて形成された地形と優れた風致景観」

1 サンニヌ台【沖縄県八重山郡与那国町】

与那国島東部の南東岸に位置し、急崖や台地状の地形が約1.3kmにわたって展開する岩石海岸で、地域の伝承を刻む風致景観。砂岩の層理と直線的な節理や断層に沿って風化・侵食が進行し、特徴的な地形を呈する。これらの地層には、琉球弧の変遷を示す化石や地殻変動の痕跡が良好に保存される。



提供：与那国町

【天然記念物】 1件

「国内では2か所にのみ隔離分布する氷期の^{いそんしゅ}遺存種 ヤチカンバの良好な生育地」

1 ^{にしべつしつげん}西別湿原 ^{ぐんらく}ヤチカンバ群落 ^{のつけぐんべつかいちょう}【北海道 野付郡 別海町】

ヤチカンバは、主にユーラシア大陸北東部に分布し、国内では2か所にのみ^{かくりぶんぷ}隔離分布する^{ひょうき}氷期の^{いそんしゅ}遺存種であり、過去の遺伝的多様性をよく維持していると考えられることから学術的に貴重である。西別湿原は、北海道東部における典型的な湿原であり、ヤチカンバの良好な生育地である。



提供：別海町

《登録記念物の新登録》

【名勝地関係】 4件

「妖怪などの伝承と結び付いた数々の^{しんえん}深淵をはじめとする^{けいりゅう}溪流の景勝地」

1 ^{ふじかわだに}藤川谷 ^{みよしし}【徳島県 三好市】

妖怪などの伝承と結び付いた数々の深淵をはじめとする溪流の景勝地であり、近年、地域においてその再発見、継承活動にも活発に取り組まれている点でも意義深い。今回は、支流を含め全長約12kmのうち、中流域の2km余りを登録する。



提供：三好市

^{たしぶのしょう}「田染荘 地域の^{まどんいわ}間戸ン岩の^{がんぼうぐん}岩峰群の景勝と岩屋から成る名勝地で、田園風景も一望する。」

2 ^{ゆうひいわや}夕日岩屋 ^{ぶんごたかし}【大分県 豊後高田市】

田染荘地域の間戸ン岩と呼ばれる岩峰群の西側に所在する岩屋で、近世から近代にわたって西麓の^{たしぶおさき}田染小崎から臨むその景勝が称えられ、また、近年には田染小崎の田園風景を展望する地点として定着している点でも意義深い。



提供：豊後高田市

「田染荘地域の間戸ン岩中腹から東を向く岩屋で、中世以来の水にまつわる信仰の名所」

3 朝日岩屋【大分県 豊後高田市】

田染荘地域の間戸ン岩と呼ばれる岩峰群の東側に所在する岩屋で、古くからの信仰を伝える名勝地であり、水の確保に苦心してきた田染真中の地域の岩峰と岩屋に込められてきた思いを知る上で意義深い。

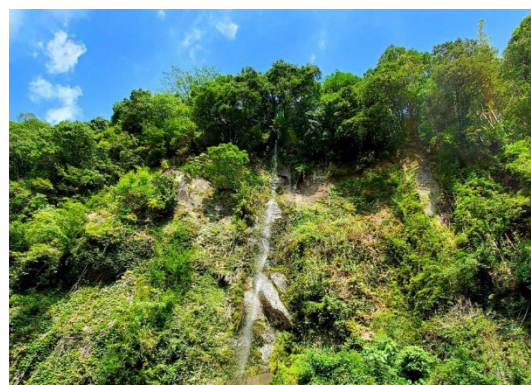


提供：豊後高田市

「城原井路の末流の断崖に流下する人工の滝で、その名を 広瀬淡窓の漢詩に由来する。」

4 落門の滝【大分県 竹田市】

第3代藩主 中川久清が熊沢蕃山を招いて作らせた灌漑用水の城原井路の末流の断崖に落差約40mを流下する滝で、その名称は広瀬淡窓の漢詩に由来し、地域において長く親しまれてきた人工の瀑布から成る風致景觀の事例として意義深い。



提供：竹田市

史跡名勝天然記念物の指定等

《史跡の新指定》 9件

1 ^{じゅうごろうあなよこあなぐん}十五郎穴横穴群【茨城県ひたちなか市】

十五郎穴横穴群は、関東平野の北縁、太平洋に東流する那珂川^{なかがわ}の支流である大川^{おおかわ}と本郷川^{ほんごうがわ}に挟まれた舌状台地南端部に位置する横穴墓群である。崖面に造られた横穴墓群は、大きく3つの支群に分けられ、北端台地は「指洪支群^{さしぶしぐん}」、南側台地は「館出支群^{たてだししぐん}」、西方台地は「笠谷支群^{かさやしぐん}」と呼ばれている。

横穴墓は、これまでの調査で274基が確認されており、未知のものも含めると、総数500基以上と推測されている。各支群の造営が7世紀前葉に始まったことが玄室構造から判明している。また、7世紀前葉から8世紀まで造られた横穴墓が、9世紀前葉まで追葬で使用されていることも確認された。古墳時代終末期から平安時代初頭に至るまでの集団の展開過程を知る上で重要である。

各支群の台地上には、首長墳^{しゅちょうふん}が横穴墓と密接な関係をもって展開する。指洪支群では、台地上で最初の前方後円墳である史跡虎塚古墳^{とらづかこふん}の築造とほぼ同時期に横穴墓が造られるのに対し、館出支群では古墳は築造されず、後背墳丘^{こうはいふんきゅう}をもつ横穴墓が造られる。笠谷支群では最初の前方後円墳である笠谷第6号墳に後続する笠谷第7号墳とほぼ同時期に横穴墓の造墓が開始する。この多様さは、横穴墓の造墓集団と首長層の関係や、造墓集団間を考える上で重要である。

十五郎穴横穴群は、7世紀前葉に造営が始まり、9世紀前葉まで追葬で使用された東日本最大級の横穴墓群であり、古墳時代終末期から平安時代初頭の東日本社会を考える上で重要である。

2 ^{あねがこうじしるあと}姉小路氏城跡【^{ひだし}岐阜県飛騨市】

^{ふるかわじょうあと}
古川城跡

^{こじまじょうあと}
小島城跡

^{のぐちじょうあと}
野口城跡

^{むかいこじまじょうあと}
向小島城跡

^{こたかりじょうあと}
小鷹利城跡

姉小路氏城跡は、14世紀後葉に飛騨国司となった藤原北家^{ふじわらほっけ}出身の姉小路氏が、任国後に土着し^{こくじん}国人となり、古川盆地の要衝に築いた中世山城群である。飛騨国に赴任した姉小路氏は、盆地内の^{ふるかわごう}古川郷、^{こじまごう}小島郷、^{こたかりごう}小鷹利郷にそれぞれ拠点を持つ古川氏、小島氏^{むかい}、向氏の三氏に分かれ各々の地域に山城を築いた。盆地南部の入口には古川城跡（標高624m）、盆地中央部で街道を見下ろす小島城跡（標高617m）、盆地北部

で越中^{えっちゅう}方面と神岡^{かみおか}方面の分岐点に野口城跡（標高558m）、盆地西部では向小島城跡（標高646m）、西部の山間部との境界に小鷹利城跡（標高787m）が残る。各城は、16世紀前葉以降、高山^{たかやま}に進出した三木氏^{みつぎし}が北部の江馬氏^{えまし}等との争いにより改修、整備し、三木氏が古川盆地を制圧した16世紀後葉には、古川城跡に石垣が築かれ、盆地内の各城が連動して盆地外へ向かって堀切等が築かれる。天正^{てんしょう}13年（1585）に金森長近^{かなもりながちか}が飛騨国を侵攻し支配下に収めると古川城跡・小島城跡を改修し、他の山城は廃城となった。

国司から国人として定着した珍しい氏族である姉小路氏が築き、中世飛騨国の政治状況による改修の跡を残しており、当地の政治勢力の様相と変遷を知るために重要な山城群である。

3 三河国府跡【愛知県豊川市】

三河国府跡は、豊川市西部を南北に流れる西古瀬川^{さいこせがわ}と音羽川^{おとわがわ}に形成された通称白鳥^{しろとり}台地の先端付近に立地する古代三河国の国府跡である。国庁の正殿^{せいでん}と考えられる石組雨落溝^{いしぐみあまおちみぞ}を伴う四面廂建物^{しめんびさし}、後殿^{こうでん}と考えられる東西棟の大型掘立柱建物^{ほったてばしら}、南西では西脇殿^{にしわきでん}の可能性がある掘立柱建物、南東では東脇殿^{ひがしわきでん}と考えられる長舎^{ちやうしゃ}状の建物を確認した。これら国庁の主要建物はコの字形配置をとり、掘立柱塀で圍繞^{いじょう}される。主要建物の配置や圍繞施設は、その成立から廃絶までの間に大きな変化は認められないものの、発掘調査の成果と出土遺物の検討から、主要建物は9世紀初頭から10世紀中葉までの間に3期の変遷が認められる。出土遺物には蹄脚円面硯^{ていきやくえんめんけん}や「國厨^{くにのくりや}」と墨書された9世紀代の須恵器^{すえき}、10世紀中葉に廃棄された緑釉陶器製の陶印^{りよくゆうとうき}、緑釉陶器、製塩土器等、国府における文書行政、給食、饗応^{きやうおう}等に関係すると考えられる遺物がある。

三河国府の国庁が、コの字形の建物配置をとるようになるのは、9世紀初頭であり、その形状を踏襲しつつ10世紀中葉に廃絶することが判明するなど、律令国家の地方支配の拠点となる国府の実態と変遷、さらには古代の地方支配の実態を知る上で極めて重要な遺跡といえる。

4 尾高城跡【鳥取県米子市】

尾高城跡は、出雲^{いずも}と西伯耆^{にしほうき}を結ぶ東西交通と、山間部と日本海をつなぐ南北交通の結節点に築かれた中世城館である。13世紀から14世紀の有力な在地領主の住居跡と考えられる四面廂付礎石建物^{しめんびさしつきそせきたてもの}から始まり、15世紀には方形単郭^{ほうけいたんかく}や群郭^{ぐんかく}の平城が築

かれ、16世紀には大型の堀と土塁を巡らせた^{くるわ}曲輪が整備され、さらに本丸、二の丸といった山城が整備されるなど増築を重ねた城郭である。16世紀前半の城主は、山名^{やまな}一族の系統に連なる有力国人で西伯耆^{さくわき}一帯を勢力下に置く幸松氏であった。尼子氏の侵攻により幸松氏は退去するが、尼子氏と毛利氏^{もうりし}の攻防の地となり、尼子氏滅亡後は吉川^{きつかわひろい}広家が家臣に命じて、本丸の土塁と^{きりぎし}切岸を改変し^{せきるい}石塁と北堀に石垣を設けた。関ヶ原の戦い後は、中村一忠^{なかむらかずただ}が^{よなごじょう}米子城の完成まで尾高城に入る。慶長20年（1615）の^{いっこくいちじょうれい}一国一城令により廃城となるが、転落した^{つきいし}築石、崩落し堆積した^{ぐりいし}栗石が本丸北堀の堀底に散乱しており、破城^{はじょう}の痕跡を伝える。

城主の変遷と各段階での改修状況等が良好に残り、交通の要衝に位置し、空堀^{からぼり}や土塁で形成される土の城から、一部に石垣を築いて^{ついでい}築地塀を導入するなど近世城郭へ移行する様子、また、一国一城令による破城の状況も判明する重要な城郭である。

5 ^{ひろしまげんぱくいせき}広島原爆遺跡【^{ひろしまし}広島県 広島市】

広島原爆遺跡は、第二次世界大戦の末期である昭和20年（1945）8月6日に広島にアメリカ軍により投下された原子爆弾（以下「原爆」と略す。）の被害の実相を伝える遺跡である。爆心地から1.4kmまでは人体に致命的な^{ねっしょう}熱傷を与え、2km以内では大半の建物が全壊全焼した。原爆による被害は、爆風、熱線、放射線が挙げられ、同年中に約14万人が死亡したと推定されている。

^{きゅうねんりょうかいかん}旧燃料会館（現・平和記念公園レストハウス）は、地階には火災痕である^{すす}煤のある天井や、爆風の影響で押し上げられたと推定される天井スラブが残る。^{きゅうにつぼんぎんこう}旧日本銀行^{ひろしましてん}広島支店は爆風による地階の扉の^{ちょうつがい}蝶番の損傷や、2階の木製の^{こしかべ}腰壁には窓ガラスの破片が突き刺さった痕などが残る。^{きゅうほんかわこくみんがっこうこうしや}旧本川国民学校校舎（現・本川小学校平和資料館）は炭化した^{もくれんが}木煉瓦や焼け焦げた^{とわく}戸杵・配電盤が残る。^{きゅうふくろまちこくみんがっこうこうしや}旧袋町国民学校校舎（現・袋町小学校平和資料館）は被爆後臨時救護所となった際に記された伝言や炭化した木煉瓦が残る。^{たもんいんしょうろう}多聞院鐘楼は爆風によって損傷した天井や梁をそのまま残す。^{きゅううちゅうごくぐんかんく}旧中国軍管区司令部^{しれいぶほうくうさくせんしつ}防空作戦室は、当時勤労働員されていた高等女学校の生徒が、電話により四国軍管区司令部と福山の部隊に被爆直後に被害を伝えた場所である。

広島原爆遺跡は第二次世界大戦末期における原爆投下の歴史的事実と、人類史上初めて使用された核兵器の被害、戦争の非情さを如実に伝える遺跡である。

6 ^{さいじょうさかぐらぐん}西条酒蔵群【^{ひがしひろしまし}広島県 東広島市】

西条酒蔵群は、西条盆地北部に所在する旧^{さいごくかいどう}西国街道の^{しゅくばまち}宿場町西条の、近世に始まり

近代に発展し、現在も続く全国屈指の酒蔵群である。西条では、文化 2 年（1805）には島家が酒造を行っていたことが記録に見え、明治 20 年代末に行われた三浦仙三郎による軟水醸造法の確立、明治 27 年（1894）の山陽鉄道の広島駅までの延伸、木村酒造場におけるいち早い動力式精米機の使用などにより、明治 40 年（1907）には広島酒が全国で認められるに至っていた。

指定を行おうとするのは、西条で最初期より酒造を行ってきた島家の白牡丹酒造の延宝 3 年（1675）建設とされる延宝蔵、木村酒造場の後継である賀茂鶴酒造の明治初期建設の一号蔵、昭和 4 年（1929）建設の旧広島県醸造試験場、当時の西條町長の発起で造られた西條酒造株式会社の後継会社である福美人酒造の、大正 14 年（1925）に建設された西条で最大の酒蔵である大黒蔵である。

西条酒蔵群は、旧西国街道沿いの町家の背後に建てられた小規模な酒蔵から、近代以降町並みの背後の農地を利用した大規模な酒蔵へと発展していく様子を理解することができ、また、近代酒造業の拡大の変遷を追うことのできる歴史的に重要な酒蔵群である。

7 勝賀城跡【香川県高松市】

勝賀城跡は、高松市西端に所在し、瀬戸内海や高松平野を一望できる標高 365m の勝賀山山頂に位置する中世山城である。北には港町の香西浦があり、香西浦の後背地には勝賀城跡の山麓居館と伝わる佐料城跡があり、在庁官人出身の系譜を持つ香西氏の拠点であった。香西氏は、室町時代には管領細川京兆家の内衆として、上京した「上香西」と讃岐に残った「下香西」に分かれ勢力を誇った。

勝賀城跡は、標高 320m 付近から頂上までの讃岐岩質安山岩の分布範囲に城郭遺構が収まる。山頂部中央に堀切状の遺構と土塁を組み合わせた遺構があり、それを境に、北東部は尾根上に平坦部の曲輪が連なる連郭式の構造で、南西部は主郭及び全体に折れを伴った土塁が囲み、喰い違い虎口や方形曲輪など 16 世紀後半に出現する新しい構造を持つ城郭遺構が見られる。主郭周囲では建物遺構や遺物がほとんど検出されず、恒常的な建物を建てない陣城的な性格が考えられ、時期について天正 13 年（1585）の羽柴秀吉による四国攻めの際に、改修されたと想定される。

中世香西氏の拠点であった山城が羽柴秀吉の四国攻めに際して改修され、四国統一をめぐる戦乱の舞台となり、また、改修過程が遺構として残る重要な城跡である。

8 博多遺跡【福岡県福岡市】

福岡県福岡市博多区に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である博多遺

跡群のひとつで、中世の港湾に係る遺跡を指す。福岡市教育委員会が実施した発掘調査で、拳大から人頭大の石を幅 1.2 ～ 1.6 m、高さ約 60 cm の列状に積み上げた護岸と考えられる石積遺構が約 70 m にわたって検出された。時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半に機能し、12 世紀中頃から後半の洪水堆積物で埋没している。当時の水際から 6 m ほど陸側の砂丘末端から河川堆積層にかけて直線的に構築されており、海側の石材は面を強く意識している。その位置や構造から港湾施設と考えられる。また、これと同様の港湾施設が中国の寧波^{にんぽー}や温州^{おんしゅう}で発掘されていることから、宋商人らが関与して構築されたと想定される。

石積遺構の周辺には石積遺構と同一の方向をとる同時期の遺構群が展開し、また汀^{てい}線^{せん}際に投げ捨てられた白磁^{はくじ}一括廃棄遺構等が検出されていることなどから、宋商人の居住区である「筑前博多津唐房^{ちくぜんはかたつとうぼう}」に関連する区画が付近に存在した可能性が示されている。出土遺物には、多量の貿易陶磁器片のほか、日宋貿易の主要な輸出品のひとつであった大分県九重硫黄山^{くじゅういおうざん}産や鹿児島県硫黄島^{いおうじま}産の硫黄が出土していることが注目される。

鴻臚館^{こうろかん}に代わる新たな施設として 11 世紀後半に造られた港湾施設で、中世のアジア規模での交易の内容やその担い手を示す重要な遺跡である。

9 菊池氏遺跡【熊本県 菊池市】

菊池氏遺跡は、熊本県北部、菊池川^{きくちがわ}中流域に位置する九州を代表する中世武士団、菊池氏関連の館跡^{やかたあと}と宗教施設等からなる遺跡群である。菊池氏は、平安末の肥後国^{ひごのくに}最有力武士、鎌倉時代には鎮西^{ちんぜい}随一の国御家人^{くにごけにん}、南北朝期には鎮西宮方勢力の主宰者、室町期の肥後国守護として、九州の中世史を体現する存在である。現在の菊池市の中心部は室町時代以降に菊池氏が本拠を置いた隈府^{わいふ}にあたるが、初代則隆^{のりたか}から 15 代武光^{たけみつ}の間は、その南方にある深川^{ふかがわ}・北宮^{きたみや}地区に本拠が置かれていたと伝えられる。菊池市はこの地区に所在する菊池氏の本拠と伝えられる北宮館跡^{きたみややかたあと}、菊池氏と水運との関係を示す菊之池^{きくのいけ}B 遺跡の調査を行い、前者では 13 世紀の館跡に関係すると考えられる遺構を検出し、後者では 13 世紀の河川護岸を検出した。これらに応永^{おうえい}10 年（1403）に菊池武朝^{たけとも}らが神像^{しんぞう}を寄進した北宮阿蘇^{きたみや あそ}神社を加え菊池氏遺跡として史跡に指定する。

菊池氏遺跡は菊池氏の中世の本拠地の具体像を示す遺跡群であり、そこから中世武士団の領域経営の在り方を知ることができる。また、隈府の遺跡も併せ検討することにより、肥後国最有力武士から肥後国守護へと成長する過程を示す重要な遺跡群である。

《特別史跡の追加指定》 2件

1 藤原宮跡【奈良県 橿原市】

持統天皇8年(694)から和銅3年(710)まで営まれた古代の都城跡。藤原京跡の中心部に位置し、約1km四方の区画内に内裏、大極殿及び役所群が建てられた。今回、条件の整った区域を追加指定する。

2 高松塚古墳【奈良県 高市郡 明日香村】

奈良県明日香村に所在する飛鳥時代末の直径約23mの円墳。埋葬施設である切石積の横口式石槨の壁面には極彩色の大陸風壁画が描かれており、律令国家成立期の葬送儀礼や東アジア世界との交流を考える上で極めて重要である。今回墳丘の一部について、条件の整った区域を追加指定する。

《史跡の統合・追加指定及び名称変更》 1件

1 総社古墳群【群馬県 前橋市】

遠見山古墳
二子山古墳
愛宕山古墳
宝塔山古墳
蛇穴山古墳

群馬県中南部に所在する古墳群。5世紀後半から7世紀後半にかけて首長墳が連綿と築かれており、古墳時代から飛鳥時代の地域首長の動向やヤマト王権との政治的関係を知る上で重要。既指定の二子山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳を統合し、かつ、遠見山古墳、愛宕山古墳を追加指定し、総社古墳群に名称を変更する。

《史跡の追加指定及び名称変更》 3件

1 江馬氏城館跡【岐阜県 飛騨市】

下館跡
高原諏訪城跡
傘松城跡
土城跡
寺林城跡

まさもとじょうあと
政元城跡
ほらじょうあと
洞城跡
いしがみじょうあと
石神城跡

(傘松城跡を追加指定する)

飛驒国北部 ^{かみおか} 神岡 周辺を本拠とする豪族江馬氏の城館跡。各城跡は交通の要衝に位置する。下館跡の正面に位置する傘松城跡は、標高 803 m にあり周囲の諸城を見渡し、堀切等西方へ防御を意識した配置である。江馬氏の領域支配を担った重要な城跡であり、追加指定する。

2 ^{さやまいけ} 狭山池 ^{いけもりたなかけきゅうたく} 附 池守田中家旧宅 ^{おおさかさやまし} 【大阪府 大阪狭山市】

(^{つけたり} 附 として池守田中家旧宅を追加指定する)

7 世紀の築造以来、大阪南部の水源を担う狭山池を江戸時代に管理した池守が田中家である。江戸時代以来の池守田中家の屋敷地には、18 世紀前期頃の建造と推定される主屋が移築されずに現存し、長屋門や土蔵等も残る。江戸時代の狭山池やその水利管理を行った場所として、狭山池に附として追加指定する。

3 ^{いよへんろみち} 伊予 遍路 道 ^{うわじまし} 【愛媛県 宇和島市、^{せいよし} 西予市、^{おおずし} 大洲市、^{まつやまし} 松山市】

^{かんじざいじみち}
観自在寺 道

^{いなりじんじゃけいだい} ^{りゅうこうじけいだい}
稲荷 神社 境内 及び 龍光寺 境内

^{ぶつもくじみち}
仏 木寺 道

^{めいせきじみち}
明石寺 道

^{めいせきじけいだい}
明石寺 境内

^{だいほうじみち}
大寶寺 道

^{だいほうじけいだい}
大寶寺 境内

^{いわやじみち}
岩屋寺 道

^{いわやじけいだい}
岩屋寺 境内

^{じょうるりじみち}
浄瑠璃寺 道

^{じょうるりじけいだい}
浄瑠璃寺 境内

^{やさかじけいだい}
八坂寺 境内

^{じょうどじけいだい}
浄土寺 境内

^{よこみねじみち}
横 峰寺 道

^{よこみねじけいだい}
横 峰寺 境内

さんかくじおくのいんみち
三角寺 奥之院 道

(明石寺道、大寶寺道の一部及び八坂寺境内を追加指定する)

愛媛県内の遍路道の総称。四十二番札所仏木寺から四十三番札所明石寺に至る道である明石寺道のうち宇和島市域の一部、西予市・大洲市域の第四十四番札所大寶寺に至る大寶寺道、松山市に所在する第四十七番札所八坂寺境内を追加指定する。

《史跡の追加指定》 17件

1 しらかわかんがいせきぐん **白河官衙遺跡群** しらかわし **【福島県 白河市】**

せきわくかんがいせき
関和久官衙遺跡
かりやどはいじあと
借宿廃寺跡

福島県中通り地方南部に所在する官衙遺跡群。関和久官衙遺跡が古代白河 ぐうけ 郡家、借宿廃寺跡がこれに付属する古代寺院と考えられ、古代の地方支配体制を知る上で重要。今回、借宿廃寺跡のうち、講堂の ほりこみちぎょう 掘込地業の北東隅部分とその隣接地について、条件の整った区域を追加指定する。

2 こうずけのくにさいぐんしょうそうあと **上野国佐位郡正倉跡** いせさきし **【群馬県 伊勢崎市】**

7世紀後半から10世紀前半にかけて機能した上野国佐位 ぐうけ 郡家の しょうそう 正倉と考えられる遺跡。正倉は総面積6万㎡の全国でも最大級の正倉域を持ち、一角には「こうずけのくにこうたい上野国 交替実録帳」で「はちめんこうそう八面甲倉」と記載された建物に符号する総柱で八角形の礎石建物が形成され、上野国佐位郡家であることが決定づけられた。今回、条件の整った区域を追加指定する。

3 さんやかいづか **山野貝塚** そでがうらし **【千葉県 袖ケ浦市】**

東京湾東岸（房総半島西部）に位置する縄文時代後期から晩期の大型 ばていけいかいづか 馬蹄形貝塚。この地域に集中する大型貝塚群の中で、現存する事例としては最南端に位置する。現在でも馬蹄形の貝塚の形状をそのまま見ることができる。出土した魚類遺体は、東京湾東岸の中央部に位置する地理的特徴をよく表している。今回、条件の整った区域を追加指定する。

4 しもうさこがねなかのまきあと **下総小金中野牧跡** かまがやし **【千葉県 鎌ヶ谷市】**

江戸時代、幕府が軍馬育成のため設けた牧の遺跡であり、幕府による軍馬生産の様相を知る上で重要。放牧していた野馬を捕らえる「捕込^{とっこめ}」と呼ぶ施設と野馬土手^{のまどて}から成る。今回、条件の整った区域を追加指定する。

5 下野谷遺跡^{したのやいせき}【東京都西東京市^{にしとうきょうし}】

墓と考えられる中央部の土坑群^{どこうぐん}を取り囲むように、竪穴建物群^{たてあな}と掘立柱建物群が直径150mの範囲で配置される。規模・内容とも南関東の同時期の集落では傑出しており、縄文時代中期後半の大規模な環状集落として重要。今回、条件の整った区域を追加指定する。

6 下寺尾官衙遺跡群^{しもてらおかんがいせきぐん}【神奈川県茅ヶ崎市^{ちがさきし}】

神奈川県東部に所在する相模国高座郡家^{さがみのくにたかくらぐうけ}と考えられる官衙遺跡群。郡庁・正倉は7世紀末から8世紀中葉まで2期にわたって変遷し、その南西部には七堂伽藍^{しちどうがらん}跡と呼ばれる寺院が所在している。今回、条件の整った区域を追加指定する。

7 下寺尾西方遺跡^{しもてらおにしのかたいせき}【神奈川県茅ヶ崎市^{ちがさきし}】

弥生時代中期後半に営まれた環濠集落跡^{かんごうしゅうらくあと}。出土遺物には土器のほか石器と鉄器があり、利器が石器から鉄器へと移行していく時期の在り方を示している。南関東における拠点集落であり、弥生時代中期社会の様相を知る上で重要。今回、条件の整った区域を追加指定する。

8 小島陣屋跡^{おじまじんやあと}【静岡県静岡市^{しずおかし}】

興津川^{おきつがわ}の河岸段丘上に位置する、宝永元年（1704）に建設された小島藩一万石の陣屋跡。地形に合わせて石垣で囲まれた曲輪^{くるわ}が配置され、主郭には現在、指定地外に移っていた御殿を再移築中である。今回、指定地東側に位置する馬場跡^{ばばあと}の追加指定を行う。

9 山科本願寺跡^{やましなほんがんじあと}及び南殿跡^{なんでんあと}【京都府京都市^{きょうとし}】

浄土真宗中興の祖、八世蓮如^{れんによ}が京都山科に造営し、御本寺^{ごほんじ}、内寺内^{うちじない}、外寺内^{そとじない}の三重構造からなる寺内町を形成した。蓮如が没した南殿と御本寺部分の一部に加え、御本寺の中心部と、北西角部の土塁と外堀、江戸時代以降に山科本願寺の遺構を守り伝えた奥田家^{おくだけ}の屋敷地を追加指定する。

10 ^{まきむくこふんぐん} 纏向古墳群【^{さくらいし} 奈良県 桜井市】

奈良盆地東南部に位置し、弥生時代終末から古墳時代初頭の定型化以前の前方後円形の墳丘を持つ5基から成る古墳群で、我が国の古代国家形成期の様相を知る上で重要。既指定の古墳2基のうち、^{まきむくいしづか} 纏向石塚 古墳の一部で条件の整った区域を追加指定する。

11 ^{だいかんだいじあと} 大官大寺跡【^{かしはらし} 奈良県 橿原市、^{たかいちぐん あす かむら} 高市郡 明日香村】

^{ふじわらきょうじょうぼう} 藤原京条坊 の南東に位置する巨大な古代寺院跡。天武2年（673）に建立した^{たけちおおでら} 高市大寺 を天武6年（677）に大官大寺に改称し、現位置には^{もんむ} 文武 朝に移ったと考えられる。平城京 ^{だいあんじ} 大安寺 の前身寺院。^{こんどう} 金堂 や講堂、塔、回廊の跡などが残る。今回、講堂跡や北面回廊跡の条件の整った区域を追加指定する。

12 ^{なかおやまこふん} 中尾山古墳【^{たかいちぐん あす かむら} 奈良県 高市郡 明日香村】

飛鳥時代末の対辺長約19.5mの^{はっかくふん} 八角墳。三段築成で一・二段目に^{きだん} 基壇 状の石積を施す。埋葬施設は^{きりいしづみ} 切石積 の^{よこぐちしきせつかく} 横口式 石槨 で、火葬骨が埋納されたとみられる。古墳文化の終焉と律令国家成立過程における墓制の変遷を知る上で重要。今回、墳丘外周の石敷の条件の整った区域を追加指定する。

13 ^{あすかきゅうせき} 飛鳥宮跡【^{たかいちぐん あす かむら} 奈良県 高市郡 明日香村】

7世紀代に歴代の天皇の宮殿が造営された宮跡。発掘調査の結果、^{あすかおかもとのみや} 飛鳥岡本宮（^{じよめい} 舒明 天皇）、^{あすかいたぎのみや} 飛鳥板蓋宮（^{こうぎよく} 皇極 天皇）、^{のちのあすかおかもとみや} 後飛鳥岡本宮（^{さいめい} 齊明 天皇・^{てんじ} 天智 天皇）、^{あすかきよみはらのみや} 飛鳥浄御原宮（^{てんむ} 天武 天皇・^{じとう} 持統 天皇）の各期の遺構が確認された。今回、条件の整った区域を追加指定する。

14 ^{ひのくまでらあと} 檜隈寺跡【^{たかいちぐん あす かむら} 奈良県 高市郡 明日香村】

飛鳥時代に造営された古代寺院。有力渡来系氏族である^{やまとのあやし} 東漢氏の^{うじでら} 氏寺 として重要。伽藍主要部は回廊に囲まれ、回廊の西辺に中門、南辺に金堂、北辺に講堂が取り付け、内部の中央東寄りに塔を配置するという特殊な伽藍配置をとる。今回、金堂と南面回廊について、条件の整った区域を追加指定する。

15 ^{ながさきげんぱくいせき} 長崎原爆遺跡【^{ながさきし} 長崎県 長崎市】

昭和20年（1945）8月9日に長崎に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡。

ばくしんち きゅうしろやまこくみんがっこうこうしや うらかみてんしゅどうきゅうしょうろう きゅうながさきいかだいがくもんちゅう さんのうじんじや
爆心地、旧城山国民学校校舍、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、山王神社
に とりい から成る。今回、爆心地に隣接する 下 の川と被爆樹木の 樹叢 が存在する山
王神社境内を追加指定する。

16 小部遺跡【大分県宇佐市】

大分県北部の 周防灘 に面した平野部に立地する古墳時代前期を中心とする構造の変遷が明らかな集落遺跡。古墳時代前期初頭に 環濠 集落 として出現し、前期前半に環濠内に方形区画と 大型掘立柱建物 を伴う居館へと変遷する。この時期の社会構造の変化を考える上で貴重な遺跡。今回、条件の整った区域を追加指定する。

17 塚崎古墳群【鹿児島県肝属郡肝付町】

鹿児島県の 志布志湾 沿岸に所在する古墳時代前期後葉頃から中期中葉まで営まれた古墳群。古墳文化の南限として重要。最南端の前方後円墳である51号墳や 地下式 横穴 墓 が存在する可能性のある地区について、条件の整った区域を追加指定する。

《名勝の新指定》 1件

1 白水滝【岐阜県大野郡白川村】

白水滝は 白山 の主峰である 御前峰（標高2,702m）の山頂からおおよそ5km東方の標高約1,200m付近に位置する。約2,200年前の白山の噴火で噴出した 溶岩流 によってできた平坦地から流れ落ちる直瀑で、落差は67.4mある。

滝が落ちる断崖は安山岩から成り、滝口付近は水平方向に、滝壺付近は垂直方向に伸張した 柱状節理 が見られる。通常はおおよそ250m離れた「観瀑台」から観賞するが、安山岩の断崖を背にまっすぐ落ちる姿は豪壮で、滝口周辺にはヒノキ、ツガなどの針葉樹が、その周辺にブナ、ミズナラなどの落葉広葉樹が彩りを添えている。ミズナラには巨木が多く、胸高直径が2mを超えるものもある。それらを含む落葉広葉樹が色づく紅葉の季節の美しさはひとしおである。

白水滝は、近代以前から景勝地として知られており、現在までその姿を伝える。特徴的な地形及び地質によって形成される風致景観は優秀であり、その観賞上の価値及び学術上の価値は高く、名勝に指定し保護を図るものである。

《天然記念物及び名勝の新指定》 1件

2 サンニヌ台【沖縄県八重山郡与那国町】

サンニヌ台は、与那国島東部の南東岸に位置し、急崖や台地状の地形が約1.3 kmにわたって展開する岩石海岸である。連続する断崖と特徴的な階段状の地形は、砂泥互層の地層面と、地層を直線的に破断する節理と断層に沿って、風波による侵食や崩落が繰り返されて形成される。その地質は、ユーラシア大陸から運ばれた砂や泥等を起源とし、海底に生息した生物の多種多様な生活痕等（生痕化石）が極めて良好に保存されている。ウニ類や環形動物などの食べ歩き痕（移動摂食痕）、甲殻類の巣穴化石（居住痕）、魚類が海底に形成した凹地の化石（休息痕）などがある。また、断層は、その発達過程や要因を明らかにするために必要な構造が欠くことなく良好に保存されており、与那国島のみならず琉球列島の変遷を知るために貴重である。一帯のすぐれた風致景観は、東方に位置する軍艦岩、サンニヌ台、そこから1 km余り南西に続いて断崖を成すカニマチサヤと呼ばれる海岸、そして、西端の立神岩とそれに相対するウブイティディと呼ばれる海岸から成り、伝承なども語り継がれており、観賞上の価値が高い。

《天然記念物の新指定》 1件

1 西別湿原 ヤチカンバ群落【北海道 野付郡 別海町】

ヤチカンバは、カバノキ科カバノキ属の低木で、主にユーラシア大陸北東部に分布し、国内では2か所にのみ隔離分布する氷期の遺存種である。大陸と日本列島が陸続きだった氷期には連続的に分布していたヤチカンバが、氷期後の温暖化による大陸との分断に伴い隔離されたと考えられている。西別湿原は、ヤチカンバの国内分布地のひとつとして良好なものであり、ミズゴケ群落がよく発達しイソツツジやガンコウラン、ヒメツルコケモモなど北海道東部の湿原に特徴的な種がよく見られる一方で、ヤチカンバの生育地という希有な特徴を有する。西別湿原におけるボーリング調査の結果から、亜寒帯針葉樹林に覆われていた最終氷期最盛期から落葉広葉樹林が広がった完新世までほぼ連続してヤチカンバが分布していたことが明らかになった。また、ヤチカンバの遺伝分析の結果からは、国内のヤチカンバ集団には遺伝的分化が認められなかった。大陸と北海道のヤチカンバの遺伝的分化は解明されていないものの、両者の間には葉の形質に明確な違いはなく、北海道のヤチカンバは主に栄養繁殖で増えるため隔離後の世代交代が限られていることから過去の遺伝的多様性をかなり維持していると考えられている。

これらのことから植物地理学的、遺伝学的に価値が高く、天然記念物に指定して一層の保護を図るものである。

《天然記念物の追加指定及び名称変更》 1件

1 石垣島平久保のヤエヤマシタン自生地【沖縄県 石垣市】

ヤエヤマシタンは、主にフィリピンやインドネシアに分布するマメ科シタン属の植物であり、石垣島北部の平久保には、北限の隔離分布地にあたる良好な自生地が見られる。これまでの巨樹としての保護に加え、稚樹や実生も対象に含め一層の保護を図るものである。

登録記念物への登録

《登録記念物（名勝地関係）の新登録》 4件

1 藤川谷【徳島県三好市】

藤川谷は、徳島県西端の愛媛県と高知県の県境近く、旧上名村^{きゅうかみやうむら}と旧西宇村^{きゅうにしゅうむら}の山間地域に位置する溪流で、周辺の山々に源を発する多くの支流を集めて東に流れ、大歩危小歩危^{おおほけこほけ}を成して北流する吉野川^{よしのがわ}に注ぐ溪流を成している。支流を含め全長約12 kmに及ぶこの溪流には、下流域から上流域にわたって、三段淵^{さんだんぶち}、手斧淵^{ちやうなぶち}、柴橋跡^{しばばしあと}、長淵^{ながぶち}、赤子淵^{あかごぶち}、ヨケン淵、ヒョウタン淵、くわん淵、タケノ瀬、ナゼラ、カンバ淵^{みやぶち}、宮淵、じんべ淵^{ぞうずがわ}、雑水川、どろめきの滝、アイナ淵^{いわやくび}、岩屋首^{いしがま}、石釜^{おぶち}（男淵^{めぶち}、女淵）、チョウナ淵、くも取り淵というように、神秘性を帯びて名付けられた数々の深淵などが連なっている。藤川谷が所在する山間部には、危険な土地と結び付けられた妖怪などにまつわる伝承があつて、なかでもこの藤川谷の深淵などには数多くのそうした言い伝えが定着しており、自然に対する畏敬の念のほか、特に深淵を忌避してその危険を普及する生活の知恵が反映されてきたものと考えられている。近年、そうした伝承は、地域の魅力を再発見する取組の中で見直されるようになり、継承活動にも活発に取り組まれている点でも意義深い。今回、そうした藤川谷のうちでも、けいす淵の一部を含む津屋谷^{つやだに}が合流する付近を下流端とし、ヒョウタン淵、くわん淵、タケノ瀬、ナゼラ、カンバ淵を含む約2 kmの範囲を登録するものである。

2 夕日岩屋【大分県豊後高田市】

夕日岩屋は、国東半島南西部の田染^{たしぶ}に所在し、田染小崎^{たしぶおさき}と田染真中^{たしぶまなか}の境に岩峰群^{がんぼうぐん}を成す間戸ン岩^{まどんいわ}の景勝とその中腹に西を向く岩屋などから成る名勝地である。田染は、宇佐神宮^{うさじんぐう}の本御荘^{ほんみしょう}十八箇所^{じゅうはちか所}のひとつとして平安時代後期に成立した「田染荘」^{たしぶのしょう}の故地として知られる。古く夕日岩屋は、その岩峰背面東側にある朝日岩屋^{あさひいわや}とともに、馬城山^{まきさん}（現在の真木大堂^{まきおおどう}）の末寺^{まつじ}として建武4年（1337）の「六郷山本中末寺次第并四至等注文文案」^{ろくごうさんもとなかすえでらし}（『永弘文書』）にも記される行場の一つであつた。杵築南画^{きつきなんが}の祖と称される十市石谷^{といちせきこく}（1793-1853）は山水画の画題として、田染小崎から東に臨む間戸ン岩の間を昇り来る月の風情に田染八景の一つ「間戸山月」を見出し、後の識者らもその景勝に重ねて漢詩を読み継いだ。狭小な岩陰から成る夕日岩屋には、平安時代の作と見られる木彫仏残欠や江戸時代以来の石仏が祀られている。その近傍には、岩間の細い割れ目をくぐり抜けることで生まれ変わるとされる「針の耳」が所在するほか、西側からの登拝道の途中には北西方に遠望する西叡山^{さいえいざん}を遥拝する「拝み岩」の露頭や風籠り（大風除け）の石祠などもあり、古代から続いてきた信仰の営みを伝えている。

さらに、近年では、田染荘に育まれてきた農村景観の保全が注目される中で、特徴ある展望地点としても広く普及している点でも意義深い。

3 朝日岩屋【大分県 豊後高田市】

朝日岩屋は、国東 半島南西部の 田染 に所在し、田染真中 と 田染小崎 の境に岩峰群を成す 間戸ン岩 の中腹に東を向く岩屋などから成る名勝地である。田染は、宇佐神宮の本御荘 十八箇所のひとつとして平安時代後期に成立した「田染荘」の故地として知られる。古く朝日岩屋は、その岩峰背面西側にある夕日岩屋とともに、馬城山（現在の真木大堂）の末寺として 建武 4 年（1337）の「六郷山本中末寺次第 并 四至等注文 案」（『永弘文書』）にも記される行場の一つであった。間戸の朝日岩とも称されてきた岩峰に広く挟まれた朝日岩屋には、東麓の間戸地区に産出する田染石を用いて、現存するものはおそらく近代に築かれたであろう石造覆屋などがあり、石造覆屋に安置されている激しく摩耗した木彫仏は、江戸時代の初めに火災に見舞われた 西叡山の 高山寺 から焼けながらにして飛んできた焼仏であるとも伝えられている。間戸ン岩の東麓には 二宮八幡社 や 間戸寺跡、穴井戸観音 など、特に江戸時代以降、水にまつわる観音信仰が民間に深く定着してきたことを窺わせる霊地がいくつか所在し、火砕流堆積物が分厚く台地状に堆積して河川も無く、水の確保に苦心してきた事情を窺わせる。間戸地区からの比高差 20m ほどのところに仰ぎ見て祀られた朝日岩屋は、長くそうした地域の願いを集め続けた名所として意義深い。

4 落門の滝【大分県 竹田市】

落門の滝は、大分県南西部の竹田市街地の断崖に懸かる人工の瀑布である。その成り立ちは、岡 藩主の 中川久清（1615-1681）が、備前国 岡山藩から 熊沢蕃山（1619-1691）を招請して、その指導の下に 寛文元年（1661）から同 2 年にかけて農業水利施設として開削した 城原井路 によるもので、稲葉川 支流の 久住川 に取水し、その末流のひとつとして「滝の上」から落差約 40m の崖下に広がっていた「下木」の水田に用水して、稲葉川に合流したものである。この瀑布は、会々の滝、雲井の滝、下木の滝、布引の滝、不動の滝など、さまざまに呼ばれて来たが、今日、広く「落門の滝」の名称が定着しており、その名は、広瀬淡窓（1782-1856）が、若い頃に初めて竹田に滞在したことを懐旧して詠んだ漢詩にある「断崖泉落大夫門」（断崖の泉、落つる大夫の門）に由来すると言われている。崖下の水田は、大正 13 年（1924）10 月に 犬飼線（現・豊肥本線）の延伸に伴う豊後竹田駅の開業以降、鉄道用地、道路、宅地となって今は無

いが、竹田出身の南画家・佐久間竹浦^{さくまちくほ}（1876-1925）が同年8月に描いた『落門の滝四季真景図』（六曲一隻の屏風絵）は、岡城城下町の風致景觀の要を成してきた「落門の滝」の卓越した存在感を伝えている。今では武家屋敷風に改修された竹田駅舎の背後に切り立った崖地に懸かる瀑布の姿にかつての風光明媚を伝える。